

ガンジーの思想が告発した「東大話法」

～以下、「民主主義 ここから」⁸ わが東大はけしからん」＜朝日新聞（12.11.30）＞より～

東大が抱える問題に対し、「東大話法」というキーワードで切り込んだのが、東大東洋文化研究所教授の**安富歩**（49）だ。東大話法とは何か。

常に自分を傍観者の立場に置きながら、自らの論理の欠点はごまかしつつ自分の主張を正当化する論争の技法。それが安富の定義だ。

もちろん、東大に勤める人が全員、そうした話法を使うわけではない。ただ京都大出身で、ロンドン大や名古屋大などを経て2000年に東大に赴任した安富は、東大教授らの言動に対して違和感を持ち続けていた。

その感覚が一気に強まったのが、3・11だった。

原子力を推進してきた東大教授の一人が連日テレビに登場し、原子炉建屋が爆発で吹き飛んでいるのに「格納容器の健全性は保たれています」などと平然と繰り返す様子を見ていて「東大話法」ということばが浮かんだ。

安富は著書「原発危機と『東大話法』」を出版する際、「東大話法」というセンセーショナルなことばを使わず「原子力安全欺瞞言語」とすることも考えたが、ガンジーが唱える思想の影響もあり、「東大話法」にした。

その理由を、「非暴力、不服従」で知られるガンジーの思想に触れながら語る。

「東大にいながら、『東大話法』ということばを使い、原発推進の東大教授を批判すれば私自身も危うくなる。でも、誤りを認められない人たちに誤りを認めてもらうには、自分も何らかの形で攻撃にさらされなければならない。自分を安全地帯に置いている限り、物事は変化しない。それが、私がガンジーから学んだ民主主義なんです」（松本一弥）